〔書　評〕

『国語史の中世論攷』

坂詰力治著

来田　隆

一

本書は「紀要・雑誌・論文集等に発表した国語史中世の語彙・語法に関する論文を内容により整理し、一書にまとめたもの」（序言）であり、昭和43年から平成7年までの論文が収められている。著者は、これまでに多数の総索引を作成・公刊してこられ、なかでも『論語抄の国語学的研究』（影印篇、研究・索引篇）は、評者も常々その学恩を蒙っているところであるが、本書によってこれまでの論文が一冊にまとめられ、その全体像が示されることとなった。

まず本書の目次の概略を掲げる。説明の便宜のため、各章に①から㉙の通し番号を付した。

第一篇　中世前期の語彙・語法

①第一章　『保元物語』『平治物語』の語彙論的考察

②第二章　法華百座聞書抄における助動詞

③第三章　中世語法よりみた『発心集』――国語資料としての性格――

④第四章　和漢混淆文としての『沙石集』について――漢語サ変動詞からみた和漢の混淆現象――

⑤第五章　古典語のサ変動詞についての一考察――『沙石集』をとおして見た――

⑥第六章　『無名草子』における批評語としての形容詞・形容動詞

第二篇　中世後期の語彙・語法

⑦第一章　室町時代における「こそ」の係り結び

⑧第二章　室町時代における助詞「バシ」

⑨第三章　室町時代における副詞「必ズ」と「定メテ」をめぐって

⑩第四章　中世語としての副詞「かまへて」

⑪第五章　接頭語「御」を冠した形容詞の敬譲表現――御伽草子を中心として――

⑫第六章　御伽草子の形容詞――その語彙的変遷の過程を踏まえて――

⑬第七章　御伽草子の美的表現――「うつくし」「いつくし」をめぐって

⑭第八章　御伽草子の文章
⑮第九章　国語史上における『長恨歌・琵琶行抄』
⑯第十章　『琵琶行抄』の語彙
第三篇　論語抄の国語学的考察
⑰第一章　書陵部蔵『魯論抄』の本文の考察
⑱第二章　国語資料としての書陵部蔵『魯論抄』
⑲第三章　表現形式より見た『論語抄』の文体の考察
⑳第四章　『論語抄』の漢文訓読語についての一考察
㉑第五章　『論語抄』の語法(一)
㉒第六章　『論語抄』の語法(二)
㉓第七章　『論語抄』の待遇表現――敬語動詞を中心に――
㉔第八章　『論語抄』の形容詞
第四篇　鶏肋
㉕第一章　「とばかり（暫時）」考
㉖第二章　「しばらく（暫く）」考
㉗第三章　語誌類聚
㉘第四章　御物本『更級日記』における字音語の仮名表記
㉙第五章　伏見院宸翰本『松浦宮物語』の和語の仮名遣い

目次からも知られるように、本書は著者のこれまでの論文の集成である。時代は院政・鎌倉時代から室町時代に及び、分野も語彙・語法・表記と多岐にわたっている。従って、その全体に関する言及は評者には荷が重く、個別の論文について順次感想めいたものを述べさせて頂きたいと思う。本書の概要や各論文の要点については著者によって「序言」に示されているが、記述の都合上、評者なりに概要をまとめてゆきたい。なお、第四篇「鶏肋」については、紙幅の都合もあり、取り上げないことをお断りしておきたい。

二

第一篇は中世前期の語彙・語法を論じたものがまとめられている。①④⑤は和漢混淆文資料を対象として、和漢混淆文なるものの用語の内実を明らかにしようとしたものである。

①は『保元物語』と『平治物語』について、動詞語彙・形容詞語彙の数量的考察と、和文語と漢文訓読語、変体漢文特有語の混淆の実態、サ変動詞の使用実態について、数量とともに具体例をあげて詳細に記述したものである。かかる労多き仕事は『保元物語総索引』『平治物語総索引』の作成者なればこそである。本書の「後記」で、「索引作成は語彙・語法研究の要である」と言われているが、著者と似通った体験を持つ評者には同感を禁じ得ないところである。

④⑤は『沙石集』を対象として、漢語サ変動詞の観点から和漢の混淆の実態を考察したものである。④では、他の説話文学資料のデータとの比較から、『沙石集』は「非日常的な漢語」がサ変動詞化する傾向が強いことや、それに下接する助動詞・助詞の連接

状態から、和文的要素の強い和漢混淆文であると結論されている。ここで「和文的」という場合、「ある作品が他作品との共通度の高い漢語サ変動詞を有しているということ」(151ぺ)が一つの根拠になっている。

②『法華百座聞書抄』は複数の講師の説教の聞書であり、文章構成も説話部分と説教部分とから成り、それぞれに用語に異なりを見せる興味尽きない資料である。②では、助動詞の意味・用法を説話部と説教部との分布を視点として考察されている。文献によって個別の助動詞の使用率に差異のあることを示された〈表2〉は示唆的である。

③は『発心集』慶安四年刊本について、刊本ながら成立時の鎌倉初期の語法上の特徴が少なからず認められることを述べたものである。かかる資料の場合、他に伝本が存すれば、それによって本文を校訂することが一層重要になってこよう。

⑥は『無名草子』の形容詞・形容動詞について、全体で用いられるものと批評部に用いられるものとを比較し、使用数の多い一三語について『源氏物語』批評での現れ方などを検討し、「あはれなり」に最高の美的表現価値が与えられているとされている。ただ、「作者の批評の姿勢をも窺おうとする」(197ぺ)となれば、語彙論とは別の方法が求められよう。

三

第二篇は中世後期(室町時代)の語彙・語法について論じたものがまとめられている。

⑦は室町時代に於けるコソの係り結びの崩壊過程とその要因を探ったもの。i車屋本謡曲ii大山寺本曽我物語iii虎明本狂言iv論語抄v天草本平家物語を取り上げ、結びについては助動詞のみならず全ての語が具体的に比較されている。ここに著者の徹底した方法がよく現れている。iiといった文語資料では助動詞にのみ乱れが見られ、iii以下では乱れが用言にまで及んでいることが明らかにされている。崩壊の要因については、「助動詞にその形を変えたものが少なくなかった」とする柳田征司氏説(『室町時代の国語』)を確認したものとなっている。

⑧は室町時代の口語資料七点と文語資料四点を取り上げてバシの意味・用法を考察したもの。文学的内容をもった文献では意味も用法も限定されているのに対して、抄物では幅広い用法を見せることが指摘されている。その解釈にも関わるが、キリシタン資料では口語資料でもバシをあまり用いないという指摘は重要で、この問題はもっと掘り下げて頂きたかったところである。

⑨は⑦と同じ資料を対象として、副詞カナラズとサダメテの意味・用法を比較したもの。口語性と文語性といった面からは両者に差異は認められないものの、サダメテはiiiiiiといった文学性を持ったものに多用され、カナラズはiv抄物のような文学性の希薄なものに多用される傾向があるとされる。雅俗の対立ということになるのであろうか。ただ、カナラズは断定・命令・疑問・意志などの表現に、サダメテは推量の表現に多く用いられることも

指摘されている。となれば「同義」としては取り扱えないことになるのではなかろうか。

⑩は副詞カマヘテについて、平安時代から室町時代までの資料を見渡され、中世に副詞化したこと、中世後期では命令や禁止と呼応する例が多くなること、また、平安・鎌倉時代では、和漢混淆文の軍記物語や説話文学に多く現れ、室町時代では口語資料に多用されるということが指摘されている。抄物のカマヘテについては、文献によって使用頻度に差があることを指摘され、文語資料には稀であることをふまえて、「口語的かあるいは文語的かといった各抄物文献の性格の違いに因るもの」とされる。室町時代には命令や禁止に呼応するものが多いとすれば、それぞれの文献に含まれる会話文の多寡による差異にすぎないという見方もできるのではあるまいか。

⑪⑫⑬⑭は『御伽草子』を対象としたもので、うち⑪⑫⑭は『御伽草子』の文章を雅俗折衷文体として捉え、平安時代のことばを基調とするなかに、中世語の混入がどのようなものであるかが考察されている。

⑪では、接頭辞「御」を冠する形容詞について、「御心苦し」形と「御いたはし」形の両形が見られることを指摘され、雅俗折衷の一つの姿とされる。⑫では、形容詞語彙について、語幹を基にした詠嘆表現が盛んであることなどが明らかにされている。⑭では、文末部の活用形と係り結びの実態を分析され、そこに文語としての規範意識がどのように投影しているかが探られている。文末部には、終止形を主としながらも連体形終止や已然形終止も見られることについて、『御伽草子』は「読者に伝統的な古典の文体を身につけさせるという意図をもっていたと考えられる」(375ページ)とされる点は、なお傍証が必要であろう。

⑬は『御伽草子』に於ける美を表す形容詞「うつくし」と「いつくし」を取り上げ、両者の通用の実態を具体的に示され、また、美的表現に類型性が認められると説かれている。評者が興味を引かれたのは、『御伽草子』二八篇の作品ごとに両者の使用に偏りがあるという指摘である。著者は意味の面からのみ検討され、両者を「同義」とされているが、文体的価値は当然異なっていよう。『御伽草子』内部の文体の多様性という問題にも発展する事柄である。

⑮⑯は内閣文庫蔵『琵琶行抄』を中心とした『長恨歌・琵琶行抄』の研究である。⑮では、音韻・語法・語彙の面から本抄に見られる注目される事象が取り上げられている。⑯では、内閣文庫蔵『琵琶行抄』の異なり語数と述べ語数及び注意される語が取り上げられている。多様な抄物類を語彙構造から考察してゆく上で、『六物図抄』との比較に於いて示された異なり語数・延べ語数のデータは貴重である。

四

第三篇は著者の主要研究である『論語抄』に関する論考がまとめられている。

⑰⑱は書陵部蔵『魯論抄』を対象として、その資料性や語法について論じられている。

⑰は昭和43年の発表で、著者の抄物関係論文の初出かと思われる。『魯論抄』の巻ごとの筆跡や文末部の構造などから、本抄が序文から巻六までは聞書、巻七以降は手控という二重構造をなしていることを明らかにされたものである(「補説」で明記されているように、後半部については、後に小林賢次氏(『近代語研究』5)によって補正されている)。

⑱は『魯論抄』の語法についての詳細な記述で、本抄の語法の大要が明らかにされている。⑰を読んだ読者としては、そこで明らかにされた本抄の二重構造が語法の上にどのように反映しているかについても知りたくなるところであろう。

細かく見れば気になるところもある。「カラが理由を表す接続助詞として用いられたと思われる例」として、「争(ヒ)カラ国ハ乱テ行ク物ソ」「身ノ不調カラ起ルソ」の例をあげられ、『室町時代言語の研究』の所説が引用されているところ(475ぺ)は、引用の仕方が適切でないことは、うっかりミスとはいえ、指摘しておかなければならない。

⑲⑳はゾ体を主とする口語性の強い『魯論抄』とナリ体を主とする文語性の強い成簣堂本『論語抄』とを比較しての考察である。

⑲では、接続語・文末辞・文構造から両者が比較されている。接続語については、『魯論抄』はホドニを主とし、成簣堂本『論語抄』は「間」専用であることを明らかにされている。文末辞については、ナリ・ゾの意味を「客観的指定判断」と「主観的指定判断」との違いと説かれる。抄物の文体の最も著しい特徴は文末をゾまたはナリで結ぶところにあり、その意味をどうとらえるかは今も抄物研究上の大きな課題である。

⑳では、漢文訓読語の影響という面から両者が比較されている。漢文訓読語(接続詞・陳述副詞・助動詞・助詞)の使用の有無という点から見れば、口語性の強い『魯論抄』と文語性の強い『論語抄』とに顕著な差異は見いだしがたいことが指摘されている。ちなみに、本論文より後のことであるが、接続詞「故ニ」は室町時代までは「カルガユエニ」と訓ずべきことを鈴木博氏が指摘されている(「滋賀大紀要」昭和49・3)。

㉑㉒㉓㉔は京都大学清家文庫蔵『論語抄』を対象とした論考である。

㉑㉒は動詞の語法に関する考察である。㉑では、動詞の活用形式及び音便形について、その実態が詳細に記述されている。㉒では、変格活用の動詞について、口語形と文語形との混在が指摘されている。㉑の記述のなかで、ラ行四段活用動詞の音便形の現れ方について、佐竹真次氏の『詩学大成抄』に基づく見解(「言語」昭和58・7)を引かれ、本抄にはその原則が必ずしも当てはまらないとの指摘がある。書写者が考慮されるべき問題でもあるが、個別の抄物に沈潜した研究の重要性がこういうところにも示されていよう。

なお、「コシラヘル」「答エル」「タトヘル」「ツイヘル」につい

て、山内洋一郎氏のいわゆる「擬一段化」（「国語学」88）の可能性があるとされている（520ぺ）が、室町時代の口語資料に於いてもそういうことを考慮しなければならないのであろうか。「往ぬ」の用例中（562ぺ）、「変トハ坐トキ起イヌル時起也」（三28オ14）は「寝ぬ」であろう。

㉓は敬語動詞についての詳細な記述である。㉔は、形容詞について、異なり語数・語構成の特徴・漢文訓読特有語と和文脈語との使われ方などの観点から検討されている。漢文訓読語の影響という問題については、本論文より先に発表された⑳で論じられているところであるが、形容詞の場合でも漢文訓読語と和文語との両形が見られることから、漢文訓読語は和文語との「位相差が相当失われ、ほとんど一般語彙化していた」とされている。抄物のことばは本質的に漢文訓読語の影響を免れえないものであってみれば、その使用の有無というとらえ方にはおのずから限界があるということであろう。

五

本書全般についての特色や今後の課題は、小林芳規博士の序文に尽くされていよう。博士は、「本書の特色の一つは、具体的な特定の語や語法を取上げて、対象文献の語例を網羅して拾い出し、数量的にも処理して、手堅く現象の解明に迫っている」と述べられている。誠に労作と呼ぶにふさわしい論文が少なくない。

近年、文献語学の分野に於いても理論的・体系的研究に比重が移りつつある。それは歴史的必然であろう。けれども、本書に示されているような個々の文献に沈潜した手堅い実証的研究の重要性は変わることはないであろう。

著者の主要研究テーマは『論語抄』の研究である（序言）。『論語抄』は伝本も多く、それらを系統づけた総合的な研究が必要である。著者による「論語抄の国語学的研究」の大成が待たれるところである。

最後に、繁簡宜しきを得ず、第四篇「鶏肋」については触れることができなかった点、また、細部にとらわれた書評となってしまった点について、非力を恥じるとともに、著者にご寛恕を請う次第である。

（一九九九年一月三〇日発行　笠間書院刊　A5判　七六〇ページ　本体価格一九〇〇〇円）

――京都教育大学教授――

（二〇〇一年七月一三日　受理）